

土とふるさとの文学全集

13



土とふるさとの文学全集

13

戦後のはじまり



戦後の はじまり

昭和五十一年十月二十日 発行

編集人
白井 吉見
小田 切秀雄
瀬沼 茂樹

水 上 勉
和 田 傳

発行者
高橋 芳郎

東京都新宿区市谷船河原町十一番地162
発行所
法人 団体の光協会 ©

電話 (260) 三一五一(大代表)
振替 東京 514724

印刷 三松堂印刷株式会社
製本 寿製本株式会社

戦 後 の
は じ ま り

土とふるさとの文学全集

13

やがて春に

橋本英吉 5

いまいましい村

岩倉政治 21

祝辞

鶴田知也 33

石中先生行状記

石坂洋次郎 50

花嫁と馬一匹

江口 渙 62

なつかしい山河

伊藤永之介 159

ノリソダ騒動記

杉浦明平 184

丹波アリラン

貴司山治 262

鰯雲

和田 傳 289

向い風

住井 すすゑ

379

村を出て行く

ほんまよしみ

499

解説

大島 清

531

年譜

549

装丁

伊藤 憲治

編集協力

南雲 道雄

葦山 圭介

赤星 虎次郎

やがて春に

橋 本 英 吉

一

丘ノ上助教の講演がおわった。有志だけが別室の座談会にのこった。助役、元女学校長、青年団長など。四五人の青年団員も片隅に、また女子青年が二人、悪びれもせず、出入口にちかくひかえているのが注目をひいた。もっともこの娘たちは、給仕人として残ったのかも知れなかったが。私もいとこの木実篤に誘われて傍聴した。

丘ノ上助教は神経痛の持病があると云って、オーバーで膝をつつみ、つよい近眼鏡の顔を茶卓にすりつけて、しきりに落花生をつぶしていた。助役がかたぐるしい座の空気をやわらげようとして、さっきのお話について質問はありませんか、遠慮なしにたずねて下さい、と誘い水をむけたが、やはり部屋の空気はうごかなかった。助教は人たちを無視したように、落花生をむいていた手をはらって、タバコを取りだしたが、とつぜん、

「要するに農業恐慌はおそいか早いかの差はありますが、来ることだけは確かですよ。現にまだ米が取れもしないのに、豊年という声だけで、九十円もしていた闇の米価が四十円までさがってるでしょう。こういう現象が、外国の農産物の影響もうけて、広範囲にしかも長い期間つづくのが恐慌で、今の闇物価の暴落は一種の見本なのです」と云って、神経質に膝のタバコの灰を一つ一つつまむようにして払った。

「だから今のうちに、主食一本やりの生産方式をやめて、多角経営に移ることが必要ですね」助役が補足するように口をいれるのだった。また沈黙がきた。皆はしきりにタバコを吸いはじめた。

「多角経営に移るといっても、この地方では養蚕かお茶かミカンがおもで、どうしても三四年は準備が必要ですが、この物価の高い時代にその三四年をどうして乗り切ったらいでしょう？」質問したのは青年団の幹事、草場富雄であった。二十一年の秋、近年にない豊作で、三合配給も夢ではない、という噂がしきりであった。闇値の暴落は悲壮と形容してもよいくらい、対策に農民をあわてさせている時であった。講演という何によらずおじけをふるう此の村で、農業経済の話をきくといううなことが、どうにか行われたのも、そういう時であったからだ。

「君、みんな金を持つてるじゃないか。三四年ぐらい、なんとかなるさ」助役は事もなげに云ったが、むろん、それは草場の質問の答えにはなっていないかった。

「一町たらず作って、七八人の家族を抱えているものは、売りたいくても売るのはないですよ」

「そんなら君、多角経営に移る必要もないわけじゃないか。もし作っただけ自家消費に向けてるのなら、果樹やお茶を植える余裕だってないだ

ろう。そういうのは非農家と同じで、むしろ恐慌が来た方が暮しいいかも知れないね」

助役は闇をたくともできなかったと云う草場の言分が気に入らないのか、頭からやつつけた。

「そうです。小前には恐慌を却^{かえ}って望むものもあるでしょう。他の物価もいっしょに下ってくれるならばですよ」

分団長の白井弥三次が、草場を助けるような調子で云った。助役が何か云いだそうとしたとき、助教授がさえぎった。

「この辺で養蚕をしない農家がありますか？ 農業恐慌と云つても、外国貿易に使われる作物からまず始まる可能性が多いのです。だからマヌなどは第一に値下りをくうものと思わねばなりませんよ。そうすれば小前でも困るわけです」

「そんなら多角経営も意味がなくなるのですか。マヌとお茶がまつききに値下りするとすればむしろ自給自足のための多角経営を考えた方がいいのではありませんか。大豆、綿、絹……」

「それは無茶だよ。大豆や綿は外国から安いものが、どんどん輸入されるよ」

助役がそう云うと、丘ノ上も笑うだけで、確固とした方策を提議するでもなかった。いや、ひょっとすると明確な対策を持ちあわせていないのかも知れなかった。そういう感じが全部にゆきわたると、恐慌を防ぐ方法は全くない、経済の原則に我われは結局、盲従しなければならぬ、というような嘆声があちこちからあがるのを、私はきくばかりだった。

あんがい面白い話もない、という風に一人二人ずつ人数がへって、最

後には四五人の雑談になり、見聞をひろめただけで、大した収穫もなしに散会したのは、十時すぎだった。

「今までは貧富の階級が、田地や財産を基準にして別れていたが、これからそうじゃなくなったんだ。つまり草場が云ったように家族の少ないわりに耕作面積のひろかった連中。それからブローカー。ことに軍物資などしこたま手に入れた奴らが、すっかりブルジョアになってしまった。勢力関係が変ってしまったんだな」

いとこの木実が婦りみちでそんなことを云った。

「そうだ、いつでも旦那さん然としていた地主が、いちばん変りかたが目立ってくるよ。そして我われみたいに、喰いのこした物を少しずつ闇で売るような手合は、そのときは儲けたつもりでも、多角経営なんていう時代になると、昔のままの貧乏百姓だろうよ」

いっしょに歩いていた分団長の白井弥三次が自身をあざ笑うような調子で答えた。

「いったい農村は、昔から労働力のわりに、人口が多すぎたんだね。戦時中の労働力の減った時代でも、そのわりに人口は減っていなかったらう。老人や子供をたくさん抱えているところに、日本の農村の苦しい原因の一つがあると思うな。闇の時代には一家の労働力と人口の差が、経済に非常に影響するんだよ。草場の云ったのは本当だね。まあ、今年はどういひ年はもうないだろうが、闇のつづくかぎり、頭数の多い少ないが一家の運命を左右すると思うね」私の考えに、二人は大して気のりしない返事をしていった。それで草場のことをたずねると、いろいろ説明してくれた。「草場のうちは人数が多くて、配給のほかに食糧を買わねばやってゆけないだろうね。しかしあの男も闇では相当かせいでるよ……」

ームをよこぎって、枕木でこしらえたサクを乗りこえて姿を消した。あまりとつぜんなので、同様に禁制品をかついでいる人たちは、巡査でも来たのかと、ちょっとざわついたくらいだった。透してみると、彼は駅まえの通りで、誰かと立話をしているらしかった。それからすぐ引きかえしてきて、なんでもなかったように私と話をはじめた。すると向う側の改札口から、ショールで顔をかくすようにした娘が出てきて、下りのホームにたたずんだのに気がついた。座談会の夜、あとに残った娘だったが、その様子がどうも私には、今、草場と立話をしたあとのように思われた。その駅ですれちがう電車で、隣りの町の工場にでも出勤するらしい支度だった。そしてホームの柱のかけから、草場の方にちょいちょい視線をよこしていた。しかしすぐ電車がきた。席におちついてから、私はホームにいたあの娘は、座談会に残っていたが、農村の女には珍しいではないかと、それとなく草場の気をひいてみた。

「ええ、まあ、女子青年の幹部だから、お義理でのこったんでしょう。しかしどちらかと云うと、女子青年のなかじや、開けた方ですね……工場に出ています、やはりその労働組合の役員などやってるそうですから」

彼はたしかにどきまぎして答えた。

「組合の役員ですか。そんな風にはみえなかったが。もっとも役員だからって、どうということはないですが」

東海道線にのりかえた時も、ぐあいよくいっしょの箱で、となりあって席をとることができた。前の駅から始発した列車は、まだ座席のすきさえあった。

「どうです、一本？」彼は外国タバコを一本ぬいて私にすすめ、それか

ら文化運動とは、どういうことを指すのか話してくれと云った。私は草場と初めて顔を合せたようなもので、先日、木実や白井から聞いた以上には何もしらなかったもので、概念的なことをならべてお茶をにごしていた。

「あなたの話のようだと、我われがやる素人演劇や踊りも、文化運動の一つだということになりますね。あんなものが……そういうことになるのかなあ……」と疑ぐるようにならうが、とにかく今の村の連中のやる素人劇や踊りは、なんとかしてはならぬですね。じっさいひどいですよ。もうすぐ秋祭りだから、見れば分りますがね……例えば……」と草場は熱心に或る素人芝居の筋を話した。すると退屈まぎれに立聞きしている者まで笑いだした。

「いつか○座でやったのよりひどいのですか」私は疎開したはじめにみたその印象を思いだしてたずねた。俳優難で困っていた地方の興行師が、近くの村むらから腕も相当だが、何よりうぬぼれのつよい素人芸人をあつめて、つまり芝居をうったものだ。これがまた娯楽にうえていた頃とて、大当りに当って、以来裁縫がよいの娘っ子、牛車をひく若い衆はむろんのこと、学校の子供まで、愛染かつらや、忠治子守歌につかれてしまった。それから忠治や次郎長の義理人情で涙をしぼる、と云ったような芝居が、何かというところちの若い衆に演じられた。まるで洪水のように押しよせた素人演芸は、むろん文化という字を使ってもうんぬんすべきものではなく、飢えて刑務所を出た人間の貪食作用にちがいはなかった。けれどその影響は、文化運動の名のつく真面目な企ての、凡ゆる方面に及んだ。

「○座のは素人のなかの上手な連中だし、衣裳もよかったから、とにかく

くみられたのですが、どうしてあんなものじゃないですよ。秋祭りには劇をやりたがる者も相当あるが、まさか股旅ものはやりたくないですからね。ところが外の新しいものをやるには、手ごろな脚本がないのです。去年のをもう一度やる村もあるけど、それも変だし……」

そのとき、私たちの前に腰かけていたカーキー服の青年が、とつぜん話しかけた。

「失礼ですが、あなたたちは日村じゃありませんか。私はSで、やはり青年団の世話役をしています。じつさいあの素人演芸の流行には閉口しています。たびたび私は、やるならもっと新しい内容のあるものをやろうと云ったんですが、何んとしても見物の村の連中が、新しいものは見てくれないのです。それで今では放つてあるような始末ですが、しかし考えてみると、一年に一度か二度やる村芝居に、新しいものをやつて何になるか、その時がくれば忘れてしまふのだから、みんなが楽しめるなら三度笠でも愛染かつらでも構わないじゃないか、そんな気もするんです」

草場と同年ぐらいの青年は、まじめに熱心に話しはじめた。私は、あれは文化運動とは云えない。むしろ文化運動の苗床にすぎないから、これから種をまいて、気ながく育てるほかない、と月みなことを云つた。しかしその見知らぬ男の正直な疑念に、教えられるところがないわけではなかった。

「自分でもよく分らないのだが……いったい、文化運動なんてものが、農村で必要でしょうか？ 戦争まえから文化運動はあったが、どんな実がなつたか疑問じゃありませんか？ むしろ放つておいた方がいい、何もしないでおけば、あんな下らぬ演芸もやらなかったわけです。私た

ちは下らぬとけなしているが、皆はそれが面白いのでしょう。その皆が面白がるものを止めさせて、一部の人がだけが高尚だと思っている劇や踊りを押しつける権利が私たちにあるでしょうか。低級だからいやなら、私たちが見なければいいじゃないですか。また私たちが有益だと思ふものでも、もっと教養のある人からみれば、やはり低級ではないでしょうか？」

その男の懷疑論は、実践の結果から割りだした、どうにもならぬ疑惑のように思われた。そういう懷疑論というものは、農村のありのままを見聞している者に起る当然の感想だったからだ。現に村の三十すぎの連中は文化運動なんて、腹では輕蔑しているのだった。けれど草場富雄は強い語調でその男に反対した。よい劇や踊りに高下はない。文化というもののは例えば牛乳のようなものだ。牛乳は薬のように四日や五日のんだだけでは効果はわからない。けれども二箇月も三箇月もつづけて飲んでみると、いつとはなしに体が丈夫になるから、病氣になつても抵抗力がある。けれど抵抗力ができたのは、牛乳のおかげだとは誰も思わないようなものだ。いま我われは社会道徳を失い、利己主義になつてしまつたが、それは文化というものが低かつたのだ。文化という栄養物がたりなかつたために社会的な病氣におかされると踏んばりが利かず、人が闇をやるならおれもやらねば損だと、少しの抵抗もせず、国民全体が一度にどつと、闇屋になつてしまつた。だから自分らは文化の栄養で、精神を健康にせねばならん——と甚だ巧妙に相手を説得した。がそのときふと私は、そんなにまでいう自身は、なぜ闇屋などを平氣に、むしろ誇らしげにするのだろうか、ちょっと笑いたい氣がした。

いいえ、私も牛乳をのんでいなかったのですよ、と若し私が質問した

ら、そう答えるかも知れないと思った。私たちは品川でわかれた。

三

演芸会があと四五日にせまって、他部落の出し物の噂がつたわるころだった。草場は私をたずねて、劇をやることに定ったが、脚本を書いてくれまいか。よその出し物が多いので二十分位でやれる喜劇がよい。さつそく稽古にかからねばならないから、できるならば明日にもまとめてもらいたい、と云うのだった。

「書いてもよいけれど、あまりふざけた物はいやですね。と云つても一日や二日で、いい物も考えられないし、その点さえなければ……」

「けっこうですよ。ぜひお願いします。たった二十分ですから、書きにくいでしょうが。役者が青年ばかりで、昼間は働いて、夜だけしかそいつを覚える間がないのですから、そこさえ手心して下されば……ひとつ、今までになかったような、真面目な喜劇をやりたいものですが。そうして、いい物はいいいいということになれば、この次にはよその部落でもまねをしますよ。今までの物が、みんながみんな受けたわけではないし、それはもう股旅ものなど飽きかけているのですから……ああ、云いわたしましたが、演芸会がおわってから、賞をだすことになっていきます。選者は相当な連中ですから、だいたい、いいものに賞がおちていますよ」

草場は熱心な口調で云うのだった。彼の話すことをきいているとあの見知らぬ青年と同じく、文化運動なんか無意義ではないかという時どき心をかすめる疑惑は、洗い流されるような気がするのだった。

「それはそうと、このあいだの講演会は、かなり評判になったようです

ね。僕らのような疎開者はおかげで、物が買いやすくなりましたよ」
「恐慌がくるというわけで、隠しておいた食糧を売りいそぎしてるんだが、じつさい馬鹿な話ですよ。米など半分値だそうですね。私など売るものはないけど……それからまだありますよ。耕作面積を減らして、精農で行った方が得だというわけで、小作地を返還したいが、返還すると新農地法で自作地になるべき田地が減りはしないかと、迷っているんですよ」

そういう噂も私はきいていた。つまり講師の話が、その前から人たちのあいだにあった、豊作による米価暴落の不安を、いっそうあおる結果になったのだった。おかげで私たちは、たしかに暮しよくなったけれど、いちがいに喜んでいられないのだった。というのは、その物価値下りは、心理作用の結果であるから、農村でも食糧はやはり足りないとい分れば、いつでも前に戻る性質のものにすぎなかったから。またそういう私個人の利害だけでなく、もっと広く農民の立場から考えても、単なる人氣に左右され、目さきの打算で動揺することが、如何に不利であるか云うまでもないことだった。

「ここにはまだ農民組合もできていないですね。作ろうという気持さえないのかな……農業恐慌がかりに早く来たとしても、そういう組織があつて、心をあわせてゆくことができれば、防ぐのは割合に案にできると思いますね。今の経済組織では恐慌を完全に封じることが誰にもできないだろうが、人為的なダンピングとか、農産物価の下落で輸出品のコストをさげるような政策とかは、是正することができますからね。また、供出や小作地の買入れや、ほとんど凡ての問題が、団結のあるかないかで、有利にも不利にもなるでしょう」

「いや、組合はできてはいるはずですよ。たしか先月、部落会長が判をとってまわったから。一軒のこらず入会していると思うが……」草場はまるで、遊覧団体のことでも話しているような熱のない調子で云った。

「じゃ、地主さんも組合員ですか？」

「地主と云っても大したものはいませんが、別に排斥する理由もないので、組合員になつてゐるでしょう」

「それじゃ、隣組を二重に作ったのと同じですね。組合はどんな仕事をしてゐるんですか？」私はびっくりしてたずねた。

「なにもしてはいないようですね。常会のとで、ちょっと組合の用を相談する程度らしい。我われ若い者には、ほとんど組合の話はしてくれないから分りませんがね。子供のままで女の話をしてないようなもので……」

金納になつてから小作人の主人は、地主から政府や地方事務所に变化しつつある。また予想される土地解放で、地主が無力となるとすれば、小作人を中心にする組合の存立理由は、あらかた解消したという安心があるのだろうか？と私は疑つてみた。

「噂だと、地主は政府から公定で買いあげられるまえに、親戚に分配したり、闇で売つたりしているそうだが、それができるのは、小作人がばらばらになつてゐるからじゃありませんか。もし組合などでまとめて……」私が話しかけると、彼は敏感に先をさとして答えるのだった。

「そうですね。そうです。組合でまとめて交渉すれば、地主の策動の余地はなくなるはずですよ。ところがうまくゆかない……実は私も、海に行つたり山を歩いたりしてまで、闇はしたくないのだが、その土地を買い入れる資金のことを考えると、じつにじつとしてはおれません。けなす

奴はけなせ、軽べつするならしろと、腹をきめてかかつてゐるんですよ。このさい、人に負けたら、一生苦しめねばならん。本当ですよ。今は世の中が根本から作り直されるときではないでしょうか。戦国時代だから、大名になるのも足輕でおわるのも、運と働き次第です。平和がきてからではおそすぎる。どんな立派な法律ができて、その通り行われた試しはないじゃありませんか。土地法などを当てにしたら一生下積みですよ。私はそう思つてゐる……」

草場のほかに紅がさしてきた。しきりにタバコをふかし、茶をがぶがぶのんだ。熱情にかられ、言葉はむきだしになり、怒りとも恨みともつかぬ激しい口調でつづけた。

「考えてみて下さい。借金をして家を新築して、元金はおろか利息さえ払えなかった人が、夫が出征中に女房の手ひとつで闇をやり、元金まではらつて、しかも夫が復員してくると、酒をつくつて飲ませていますよ。そんな例ならどこにだって転つてゐる。ところが一方には家を建て直すのも、闇をするのも世間にわるいから止めておこう。衣料切符もあまる位にしておけ、供出はみんな出せつてわけで、今から考えると、貧乏人のくせにと、ばか正直にあきれるような人間もかず多くあつたんですよ。そして家は雨がもる、着物はぼろぼろになる。闇物資は畑のすみっこに少しばかりのサツマしかない。おまけに土地の解放とかいうありがたいお布令です。貧乏人は正直なくせに疑いぶかく、さつぱりしているかと思ふと虚栄心がつよい、馬鹿な人間ぞろいですから、先になつて公定で土地が買えるという金銭上の利益より、いますぐ自作になつて、ちよつと肩で風をきりたいという下らぬ見栄から、まんまと地主に釣られたのだした、としたらどんなものでしょう。しかしこのえさをくいそこねた

ら百年目です。もう浮ばれっこないとわしは思いますね。一生に一度でいいから、自分の田に鋤をおろしてみたい。という望みは、屈辱と窮迫が身にしみた小作人にだけしかわかりませんよ。人の悪口がなんでしょう。一度や二度、駅でおまわりさんにおどかされる位がなんでしょう……」

彼はとつぜん気がいじみた言葉をきって、じつと考えこんでしまった。唇はぐつとしまつて、歯をかみしめた。単なる義憤にしてはあまりに烈しすぎる。それに論理は矛盾だらけだ。しかし私は全身をぶつつけてくる彼の心の底にわきたつ真実なる或るものを疑うことはできなかった。

四

途中で停電にあい、私は最終の電車でかえってきた。ホームにまいた水が凍るほど寒い晩で、駅をでるとすぐ前の樹立のかげにあるブラックに入つて、体をあたためるつもりだった。一間半四方ぐらいの家で、土間に板の腰かけと台をならべ、おでん、うどん、焼酎などを売っている。ガラスが手に入らなかったとみえ障子ばかりで、隅には店の者の寝場所らしい小さな部屋があった。そこに客があるとみえ、兵隊ぐつと女ばきのズックがそろえてあった。

「お金はいつでもいいですわよ」などというおかみさんの商売上手につられて、私は焼酎のコップを三ばいも重ね、かなりいい気持になつていった。すると背の方の障子があいて、

「どうです、こつちが暖くていいですよ。来ませんか？」と誘つたのは、草場富雄であった。女連れだから遠慮したがいいとも思つたが、好

奇心におされてふらふらと、たたみ一枚きりの部屋にがあつてみた。相手はいつかの朝、ホームで見たあんな娘で、はにかみながら膝のうえでスカートのしわを伸ばすのだった。

「あいびぎですか——今夜は稽古はなかったんですか？」私は酔つた者の特権で、露骨な冗談を云つた。「稽古はまだやっていますよ。私はぬけてきたんだが……あの劇、一等になるだろうって、みな張りきっています。やはり本職の人はちがいますね」

私はちらつく視線を娘にむけたが、たえず微笑をうかべながら、かしまつて聞いている様子が、恋人同志というよりも、年を経た夫婦と云つた感じをうけるのだった。二十四五だろるか、オーバーのえりの上で、無雑作に乱れるかみの毛に、少しほこりが浮いているのが、妙に新鮮な印象をあたえた。なんのためにわざわざ、あいびぎの場所に私を呼びこんだのか、その不審もいつのまにか忘れて、諸君の前途を祝す、というような事を云いながら、私はまた一ばい焼酎をかさねてしまった。そしてふと時計をみると十一時なので、ひきとめて娘の首尾を悪くしたのは私であるような錯覚をおぼえ、いそいで帰りたいくをはじめた。すると二人はちよつとあわて、何か目くばせし合つたようだった。

「じつはですね……この人が……」草場は云いにくそうにためらつてしたが、私の上きげんの反応に安心したか、あとはすらすらと話した。二三日まえ、私は青年団の稽古場で知人の小説家が女中を欲しがっているが、世話してくれるものはないだろうか、と相談をかけたことがあった。その女中を彼女が志願するというのである。

「欲しいのは非常に欲しがっているが、あんたは女中奉公ができないでしょう。だい一、なぜ女中などになる必要があるのです」

彼女、夏子の家は村では上農だし、勤めていると云つても、小遣いとして事務員をしてるのだらうし、それに年令、どうみても女中という柄ではなかった。

——あつ、そうだ？ ひょっとすると、なにか計画があるのかも知れんぞ！ と私はふと気がついた。と相手はそれを見抜いたかのように、「そう、女中という柄ではありません……誰にも話さないでもらいたいのですが……いろいろな訳があつて、夏子さんが村にいたくないというのが……両親とおもしろくないことがあつて……」と草場は真剣だが、あいまいに云つた。

「わかつた。夏子さんを隠すんでしょう。そして、そしておもむろに……」私は酔いに乗じて、そんなむきだしなことを云いながら、女を逃がすことはできるが、一家の柱である草場はついて行くことができないことに思いあたつて、言葉をきらざるを得なかつた。

「ええ、まあ、だいたい、そのとおりですが……どうでしょう。お世話していただけないでしょうか？」

「さあ、どんな事情があろうと、友人の方ではまじめに働いてくれればいいのでしようから。細君がお産をする、その手つだいみたいなものだから、そう長くいる必要もない。ちょうどいいにはいいが……しかし考えさせて下さい。夏子さんの両親に恨まれますからねえ」

二人は「ぜひとも」と熱心にたのんだが、私は即答できなかった。それにまだ事情もきき足りないところがあつたので。

翌日、私はいつも村の様子を探るときにするように、木実をたずねて炬のそばにすわりこんだ。

「ああ、お夏さんと草場の富ちゃん、あれはあんた、昔からのなじみ同

志で、子供まである仲じゃありませんか。富ちゃんが兵隊にゆくまえにできた子だから、五つか六つでしよう。戸籍では親の子。つまりお夏さんの妹ということにしてあるとか。そりゃあんた、村じゅうで大さわざをして、いろんな人が口を利いたもんだが、どうしてもお夏さんのお父さんが反対して、いっしょにさせないし、そうするとお夏さんも、よそには絶対に行かないつて、あんな親子もめずらしいわ」

木実のおかみさんは、いくら疎開者だってその位のことも知らないのか、とまるで私を叱りつけるような調子で説明するのだった。

「へえ、まだどういうわけで、そう頑固に反対するんでしょう？ 草場の血統でもわるいのか……」

「なんのあんた、二人が惚れあつてゐるから、いけないつてわけですよ」おかみさんが事もなげに云つたので、私は冗談だと思つた。

「惚れあつてゐるなら、なおいじやありませんか。昔ならとにかく……」

「いや、惚れ合うのは悪いことだ、と昔からきまつてゐるからね。それに草場が小作人ということも、たしかにあると思うね。あの親父は頑固だから……兵隊にゆくまえに、そうだ、にんしんしてるとき二人で逃げたが、わしら二日も仕事を休んで探しにいったよ。あの時、仲人の口のきき方がわるかつたんだ。親父もそう云つた。仲人が、どうせ惚れあつて子供までできたんだ。がんばつたつて自由結婚ができる年になる、というような理くつをぶつたものだから、おれの眼の黒いうちには、どんなことがあつても一緒ににはさせんと、親父がへそを曲げだしたんだがね」

「今でも仲のいいことを、その親父さんは知つてゐるだらうか？」

「知らないはずがないよ。村じゅう知つてゐる位だもの。あんなにこじれ

るのをね」

私はあきれた。それから五六年も耐え、もちつづけている愛情にうたれ、親父のわからずやに腹がたってきた。二人が囲みを突破するつもりなら、手びきしてやろうと決心した。

そこでさっそく東京の友人に電報で伝え、返電があつたら行くことに手はずをととのえたのである。

五

演芸会の前の晩、部落だけの小演芸会をやることになった。明日の舞台ならしをかね、部落から寄附をあつめ、あとの慰労宴の準備をしようにいうのである。出し物は私の書いた劇、女子青年の「三度笠」という股旅もの、その他舞踊と唄、最後に全員のみずほ踊り。

その日、私は村人と顔をあわせるのが照れくさく、と言つて家におちついてもいられなかった。そこへ東京から「ナルベクイソギ タノム」という返電だった。それをふところにして会場の青年館に行つて見ると、青年たちは舞台上に拡声器を持ちだしてレコードの試験中であつた。

しかし草場だけ姿がみえないので、分団長の白井にたずねると、打合せのために社務所にいつてゐるが、もう帰る頃だといふのだった。各部落の青年代表が寄つて、明日の出し物の順序、所要時間の計算、さらにレコードとか拡声器とか舞台装置とかの相談をしているのだった。会場は村の神社で、氏子の七部落が主催だった。そして舞台は神楽殿を使用する。春の祭りとちがつて、花車や神輿の賑いの代りに、青年の素人芝居で景気をつけるのである。人のいない帰り道で彼を待つことにして、藪のところに行つて日向ぼっこをしていると、彼は二三人の青年と自転車

でやつてきた。連れは協議に行つた他部落の者らしかったので、私が電報をちらつかせると、すぐ察して近づいてきた。

「お世話さんでした。しかし直ぐ行くか知ら。お祭りをしてからにしたいのじゃないかな」

草場はタバコをつけ、枯草に腰をおろし、ばんやりと流れる雲をみていた。その眼ざしには感傷的な、恋人のいない祭りが夏子よりも、彼自身の淋しさを現わしているように思われた。私は気の毒になった。おそらく彼等同志の愛情は、夏子の父をはじめ、村の人たちが軽がるしくとりざたしているほど浮わつたものではない。誠実な本然な思いやりに根ざしたものである。それにも拘わらず、再び侮辱と非難的になることを覚悟して、気苦労の多い他人の中に出てゆこうとするのである。

「とにかく、相談してみましよう。すぐでも行くというならそれでいいが、もし嫌なようだったら、祭りの翌日ということに、めんどうでも返電してくれませんか……」

「いいでしょう。話がきまれば一日や二日、向うでも待つでしょう。祭りはゆっくり遊ぶさ」

「ええ、そうです……話はちがうが今日ちょっと面倒なことが起きたんですよ。まだ外にはもらさないことに申し合せてあるのですがね。今日、みな寄つたでしょう。共同で買ったカツラとか刀とか、劇の必需品をしまつてあるお宮の帳屋を開けて、下調べをしたんですよ。おみこしや神楽の道具といっしょに、虫のくわないように保存してある倉庫ですね。ところがそこに米俵が一山、十俵です。それに地下足袋とかカンヅメとか、とにかく問題になるようなものが、いっぱいしまつてあるじゃありませんか。ごま化そうとする神主を問いつめると、どうも農業会